

樋口一葉の『十三夜』における愛と結婚

— 泉鏡花の『外科室』との比較* —

朴那美**

目次

はじめに

1. 明治時代の戀愛と結婚
2. 叶えられなかった戀
3. 愛と結婚のすれちがい
4. 泉鏡花 — 「婚禮果たしてめでたきか」

おわりに

はじめに

樋口一葉の『十三夜』(明治二十八年十二月「文藝俱樂部」第一卷十二編に發表)は、夫の暴虐に耐え切れず家出をしたものの、實家の親に説得され、忍従を強いられる婚家に戻って行く女の姿が描かれる一方で、歸り道で幼馴染の男に出くわす設定をもって、愛と結婚のすれ違いを切實と表現した作品である。主人公のお關と彼女の幼馴染の録之助との邂逅は、望まない人との結婚が招いた不幸を浮き彫りさせ、眞の愛の姿が問われるものと言えよう。

泉鏡花二十三歳の作品の『外科室』(明治二十八年六月「文藝俱樂部」)も、愛と結婚の問題を扱っている。かつて、まだ華族の令嬢であった夫人と醫學生の高峰は小石川植物園で運命の出会いをした。お互いに思いを抱きながらも、夫人は親の決めた相手と結婚をしなければならず、そのため九年後に患者と醫者として再び手術室でめぐり會っても、死に賭けてお互いの思いを確かめあうその一瞬にしか結ばれることが出来なかった。夫人は手術臺の上で死に、高峰も後を追う二人は情死を遂げる始末をもって至高至純の愛を訴えている作

* 이 논문은 상명대학교 교내연구비로 연구함

** 상명대학교 교수 일본근대문학

品である。

『十三夜』と『外科室』は「文藝倶楽部」に明治二十八年十二月、二十八年六月と発表した時期も近く、樋口一葉と泉鏡花とは明治二十八年二月から小石川戸崎町六十一番地の大橋邸に寄寓しながら、『日用百科全書』の編纂を手傳い、「通俗書簡文」を擔當して丸山福山町に一葉を訪ねる機会を得る。彼女の日記には全く記録がないが、二十九年夏には友人に似た関係であったことは鏡花が一葉に宛てて書いた手紙でわかる¹⁾ように、交流をもっていた作家同士であり、この兩作品で取り扱っている主題たるものが類似している点も見逃せない。しかし、主題の類似性は作品發表の時期が近いところからして兩作家の交流の影響よりも、當時の社會風潮の影響からうけた比重が大きいと思う。では、作品における「愛」と「結婚」という問題について触れてみたいと思う。

1. 明治時代の戀愛と結婚

「戀愛」という言葉は、本來の日本語にはなかった。「男女間の思慕の情」を意味する「戀」と、「惑るものに引きつけられ、それを慕い、あるいはいつくしみ、かわいがる氣持」を意味する「愛」という言葉は存在したが、兩者をあわせて「戀愛」という新しい造語が生まれ、異性間における思慕の感情のみに限定して使用されるに至ったのは、明治七年(一八七四)西洋語のloveを翻譯した加藤弘之氏の論文にみられたのが最初だと伝えられている。明治期の西洋文明輸入課程において、「哲學」「社會」等の、日本人にとっては新しい造語、それゆえに新しい觀念が數多く誕生したが、「戀愛」もまたそうした新しく發見された用語ないし觀念の一つのである。

それでは、近代以前において戀愛がなかったかといえ、そうではない。『萬葉集』や『源氏物語』の昔から、日本においては愛の物語に事欠かない。徳川期の封建社會に限定してみても、西鶴や近松の作品のなかに、數多くの愛の事例を見出すことができるのであるが、戀愛が日本人の人生體驗に自覺的に浸透したのは、明治二十五年(一八九二)年、北村透谷が掲載した評論「厭世詩家と女性」であった。

1) 樋口一葉宛書簡

明治二十九年五月六日[年次推定]

拜啓特に御婦人といふ心にてはかきにくゝ候まゝこれは男のともだちなみに書いたる手紙にごさ候そのおつもりにて御覽くださるべく候作日桐生にあひ候つるで何の氣なしにあのことはなし候ところはじめのうちは變な顔をいたしをり候ひしがつひに腹を立ち申候君と僕とはともだちなり(後略)

(『泉鏡花』松村友視編 解説 日本圖書センター 1997年 4月, p.235.)

戀愛は人生の秘鑰なり、戀愛ありて後人生あり、戀愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ、(略) 戀愛は各人の胸裏に一墨痕を印して、外には見ゆ可からざるも、終生抹すること能わざる者となすの寄跡なり。(略) 戀愛は一たび我を犠牲にすると同時に我れなる「己れ」を與しだす名鏡なり。男女相愛して後世界の真相を知る。細小なる昆虫も全く孤立して己が自由に動かず、人間の相世界を爲すや相倚托し、相抱擁するによりて、初めて世界なる者を建成し、維持する事を得るの理も、相愛なる第一階を登って始めて之を知る得るなれ。

と格調高い文章の近代における戀愛論は北村透谷をもって始まるのである。透谷は、人間は戀愛を経験することによって始めて、“自己が孤立して生きているのではなく、社會の一員である”ことを認識し、社會における自己の位置を知ることができるのであるとして、人格を認めあい<愛>に基づいた男女關係論を唱えた。

北村透谷の文學的才能を見出だし、「厭世詩家と女性」を世に問う機会を與えたのは、『女性雑誌』編集者巖本善治であった。巖本は、明治二十年代におけるキリスト教的な女性文化の中心的舞臺を構成した明治女學校および『女學雑誌』の主宰者として、女子教育界および女性思想界に多大な影響力を有した人物である。透谷と同様巖本もまた、フェリス學校の才媛若松賤子(嘉志子)と熱烈な戀愛の末、結婚に至った経験をもつ明治青年の一人であった。

透谷が「厭世詩家と女性」を發表するよりも以前から、巖本は『女學雑誌』紙上でしばしば戀愛を積極的に肯定する意見を表明し、さらに、戀愛イコール結婚を理想とし、道徳的にみて正しい人間同士が結婚すれば、睦まじい夫婦關係が生じ、結婚がながつづきするという西村茂樹らの道徳論者の見解を「未だ人情知らざる者の言にて、多くは交際の極理を味はざる者の果斷に出づ」(女學雑誌)第七二号、明治二二年八月二十日)と批判し、巖本は「合性」の重要性を強調する。

結婚は善男善女が一緒になったからといって成功するわけではなく、「合性」のある、すなわち戀愛關係を経過した者同士の結合こそ、幸福な結婚の第一條件であり、巖本が提唱したのは、戀愛と結婚とを直接的に結びつける戀愛結婚論である。この時期を前後して舊來の封建的な結婚觀から脱皮した男女の自由意思に基づくべきという趣旨の論調が多數現れ世を風した。主な提唱者植木枝盛は、

一個の男子たる者一個の女子たる者と同等の主義に仗り同等に慶福を收むることを目的と爲し啼に肉體の會合のみならず無限の愛情を以て其心魂を會合せしむるの契約を舉行す是れ之を婚姻とは爲すなり

[土陽新聞第一二九二号、明治二〇・二・八]

とあり、また、松村介石は、

加之元來こゝの婚たるや。固より相愛の結果にあらず。富の爲。位の爲。その他種々の誘惑の爲めに。誤り結べる悪縁にして素より心意の合うにあらねば。共に生き共に死なんと契る甲斐なく。始めのほどは。めずらしきに。しばし楽しくみへしと雖とも。須臾にして愛冷へ情戻り。夫は他に妾を求め。我が身は深閨に悶絶す。嗟呼 如何ぞ之を榮と云ひ。火輪轉じ。風波荒れ。スイート、ホームの夢覺めて。理想の彼岸。煙散霧消。是れ亦た稀有の類にあらず。(「緒言」)(『婦人のかみ』松村介石 警醒社書店 明治26年12月 p.22)

にあって、何れも舊來の婚姻制度を批判し、戀愛結婚を奨励するという論旨をもつものは當時において珍しいものではなかった。

このような当時の状況をみたと、『十三夜』と『外科室』にみられる「愛」の姿は、封建時代の殻から抜け出つつある課程の一断面を描寫しているかのようである。

2. 叶えられなかった戀

『十三夜』に描かれた「愛」の姿は、お關と録之助の幼い時の記憶に遡って出現する。二人は、子供の頃、「學校の行返りに寄つては、卷煙草のこぼれを貰ふて、生意氣らしい吸立てた」記憶をもつ仲間である。卷煙草を吸って大人びた二人を喜びあった二人の中に身分の差などは存在しない。二人は下町で幼い時を共に過ごしてお互いに結婚の相手と心の中で決めて愛を育てて来た。

私はこの人にと思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に、行々はその店の彼所へ座って、新聞見ながら商いすると思ふてもみたれど、量らぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存入れられやう。煙草屋の録さんにはと思へど、それはほんの子供ころ、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢の様な戀なるを、思ひ切つてしまへ、思ひ切つてしまへ、あきらめてしまはうと心に定めて、今の原田へ嫁入りの事にはなつたれど、その際までも涙がこぼれて忘れかねた人。私が思ふほどはこの人も思ふて、それ故の身の破滅がも知れぬ物を、我がこの様な丸鬚などに、取濟したる様な姿を、いかばかり面にくゝ思はれるであらう。夢さらさうした樂らしい身ではなけれども。

お關の、この言葉からも分かるように、彼女が結婚を望んだ相手は「煙草屋の録さん」

だった。しかし親の言うとおりに結婚をしなければならなかったその愛は實ることができなかつた。

當時の結婚慣習は自分の意思よりも親の意思によって決められていたことが次の民事慣例集²⁾からみることが出来る。

- 婚姻契約ハ父母ノ承諾ヲ必要トス若シ父母ナキ者ハ酋長ノ承諾ヲ以テ決スル事ナリ
備前國御野郡
- 婚姻ノ契約ハ雙方父母ノ承諾ニ非レハ効ナキ者トスル慣例ナリ
薩摩國鹿兒島郡
- 婚姻契約ハ雙方父母ノ承諾ヲ得ルヲ必要トシ、伯父父母ノ承諾ハ得サルモ可ナルモノトス
築後國三瀨郡

上記の諸事例ではすべて父母の婚姻同意権が謳われているが、次に挙げる事例は、父母が子女の婚姻配偶者を勝手に決定し、当事者の意志が全く無視された婚姻を強制された事情を明確に示している。

- 婚姻ハ夫婦タルヘキ雙方ノ契約ヲ要セサル者ニシテ父母近親協議ノ契約ヲ必要トスル慣習ナリ
周防國吉敷郡
- 夫婦トナルヘキ雙方父母承諾スレハ夫婦ニ於テ承諾セサルヘカラサルヲ例トス
陸前國遠田郡

(『民事慣例類集』手塚豊・利光三津夫編 慶応義塾大學法學研究会刊 昭和44年12月)

2) 『全國民事慣例類集』、司法省蔵版、明治十三年七月、pp.198~202.

司法省が民法編纂の材料に供することを目的に調査・採録した全国各地の民事慣例を整理・分類して印行したもので、この調査は明治九年(一八七六)から同十三年にかけて大規模に行なわれ、委員が各府縣に巡回出張し、あらかじめ地方官の選任した舊慣古例に精通する民間の古老から、調査事項にもとづいて直接に聞き取りを行なった。その最初の成果は、明治十年五月に『民事慣例類集』と題して刊行され(編輯責任者は司法省御用掛生田精・同七等判事長森敬斐)、ついでこれを増補・改訂した『全國民事慣例類集』が同十三年七月に印行された(編輯責任者生田精)。本書の構成は、第一篇人事、第二篇財産、第三篇契約からなり、それぞれ章・款に細分され、各條の末尾には國名・郡名が記されている。本書は、幕末から明治初年にかけての全国各地の民事慣例を知るうえで貴重な資料であり、明治民法が施行される前は『全國民事慣例類集』を民生に適用したことになる。明治民法の制定過程をみると、明治初年、太政官制度局草案・左院草案・司法省民法會議草案・明治十一年民法草案等數種の民法草案の編成をみたが、いずれも挫折し施行するに至らなかつた。その後、民法典の編纂が進められ明治二十三年(舊民法・ボアソナー民法)公布された。しかし保守派の反對にあつて施行されないまま新たな民法典が編纂され同二十九年・三十一年に公布(新民法・明治民法)施行された。(『國史大辭典』13 平成4年4月および『明治民法の制定と穗積文書』星野通 有斐閣 1966年4月などを参照して要約した。)

お關は愛する相手のことを、結婚したい相手のことを一言も口に出せず別のところへお嫁に行くしかない切ない気持ち、もし親の言うことを逆らった場合の「身の破滅」を思って諦めようと心を決めた記憶が七年ぶりの再會の瞬間で蘇ったのである。

一方、録之助のお關にたいする愛はどうだったのだろう。録之助も愛を失ってからは悲惨な生活を送っていた。放蕩し、それを止めようと別の人と結婚をしたり子供もできるなどの家庭的な幸福を試みたのだが、かれの放蕩は止められなかった。

- ・ どうにとなれ、なれ、勝手になりとて、あれを家へ迎へたは丁度貴嬢が御懐妊だと聞きました時分の事。
- ・ 人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるが、子が生れたら氣が改まるかとも思ふてゐたのであらうなれど、たとへ小町と西施と手を引いて來て、衣通姫が舞ひを舞つて見せてくれても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いた
- ・ 呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに、箸一本もたぬようになつたは一昨々年。
- ・ 車を挽くと言ふも名ばかり。何が楽しみに轆棒をにぎつて、何が望みに牛馬の眞似をする。錢を貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭やで

録之助が放蕩をはじめたのは「貴嬢は相變らずの美しくさ、奥様におなりなされたと聞いた時から」であり、お關が妊娠したと聞いた時からはその放蕩が極致に至ったのである。叶えられなかった戀ゆえに録之助は自暴自棄に陥ってしまったのである。録之助の不幸は彼の放蕩にあって、その放蕩の原因にはお關との叶えられなかった戀が大きく占めている。

録之助の愛の挫折は車夫という現在の地位が語っているように、この世の中で最低の悲惨な生活だった。車夫が惨めな職業であったことについて

雨の夜、雪の晨、偶々歩行して見れば、彼らが往來の檐下に踞まりて人影の來り近づくを窺うの状を見留む。(中略) 彼ら營業者のよつて立つ所、寒夜は股間に灯燈を挟みて暖を探り、夏は幌の裡に一睡を催うして佛曉を待ち、雨には簷下に佇立して毛布を頸より捲おろし、かくして些かに冷氣雨濕を凌ぎ、客あれば急速袴を解きて趨る。

(乾坤一布衣『最暗黒之東京』「二十四 夜業車夫」岩波書店 1988年 5月, pp.120~121.)

とあり、また、録之助が唯一の憩いの場であった寢藏の淺草の「木賃宿」について

(前略)このうち木賃宿の最も多きは、本所花町と淺草の淺草町となり、その宿泊者は日稼人足最も多く、次に人力車夫・車力・立ちん坊にしてそのほか (中略) 社會の下層に生活する

あらゆる人物は一堂に集まり（後略）

（横山源之助『日本の下層社会』岩波書店 1949年 5月, pp.65~66.）

とあるように、これは社会最低辺部にいる人達の利用する宿屋であり、録之助自身の「面白も無いこの様な姿」「お恥ずかしい身」、お關の「まあ何時からこの様な業して」「如何にも淺ましい身の有り様」という言葉からも察せられるのであるが、さらに録之助に漂っている虚無な雰囲気から彼にとって愛の喪失がいかほど大きかったかが露呈する。

お關と録之助は幼いときから互いに愛を育ってきたが、望まない結婚という妨害によってその愛が實れず、お關は不幸な結婚生活、録之助は自暴自棄の放蕩な生活をしたのである。

一方、『外科室』で描かれた愛は、「五月五日躑躅の花盛なりし」一日、「小石川なる植物園」にて出發する。それから、二人の間には何の交渉もないまま九年の歳月が流れるが、その間の高峰について此の小説の語り手の「畫師」は次のように説明する。

年齢に於ても、地位に於ても、高峰は室あらざるべからざる身なるにも關らず、家を納むる夫人なく、然も渠は學生たりし時代より品行一層謹嚴にてありしなり。

女の方は「七八歳の娘」があることから、先の出會いより一年以内に貴船伯爵と結婚したことになる。その彼女が病氣になって手術を受けなければならないことになる。執刀醫は高峰と指名したものの、彼女は麻酔劑の投與を強く拒み續ける。

此時夫人の眉は動き、口は曲みて、瞬間苦痛に堪えざる如くなりし。半ば目を睜きて、「そんなに強ひるなら仕方がない。私はね、心に一つ秘密がある。麻酔劑は謔言を謂ふと申すから、それが恐くつてなりません。何卒もう、眠らずにお療治が出来ないやうなら、もう快らんでも可い、よして下さい。」

さらに、次のような夫の温乎な言葉にも、

「私にも、聞かされぬことなつか。え、奥。」

「はい、誰にも聞かすことはなりません。」

夫人は決然たるものありき。

「何も麻酔劑を嗅いだからって、謔言を謂ふといふ、極ったことも無ささうぢやの。」

「否、このくらゐ思つて居れば、吃と謂ひますに違ひありません。」

この確信に満ちた態度をもって彼女が死守しなければならない秘密は何であるかは、次の劇的な一節に現われる。

三秒にして渠が手術は、ハヤ其佳境に進みつゝ、刀骨に達すと覺しき時、
「あ。」と深刻なる聲を絞りて、二十日以來寢返りさへも得せずと聞きたる、夫人は俄然器械の如く、其半身を跳起きつつ、刀取れる高峰が右手の腕に両手を確と取緋りぬ。

「痛みますか。」

「否、貴下だから、貴下だから。」

恣言懸けて伯爵夫人は、がっくりと仰向きつゝ、凄冷極り無き最後の眼に、國手をちつと瞻りて、

「でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい!」

謂ふ時晩し、高峰が手にせる刀に片手を添へて、乳の下深く搔切りぬ。醫學士は眞蒼になりて戦きつゝ、

「忘れません。」

其聲、其呼吸、其姿、其聲、其呼吸、其姿、伯爵夫人は嬉しげに、いとあどけなき微笑を含みて高峰の手より手をはなし、ぱったり、枕に伏すとぞ見えし、唇の色變りたり。

其時の二人が狀、恰も二人の身變には、天なく、地なく、社會なく、全く人なきが如しくなりし。

伯爵夫人の内部に育まれて來た愛が、死の瞬間に排出され、それを受けた高峰の忘れないうちの決意の言葉から、二人の切實な愛が感じられるのである。

では、伯爵夫人が謔言するのを恐れて最後まで拒み續けたのは、既に麻酔劑に對する下記のような

通常的な精神科學的面談では情報を得られない場合、藥物を使用しながら面談することもある。Sodium amobarbital(Amytal)靜脈注射がよく使われるため普通は "Amytal interview" と呼ばれている。麻酔用法 narcotherapy または麻酔分析 narcoanalysis は藥物の效力を得ながら行なう精神用法を言い、近來は殆ど使用されていない。藥物を利用する面談は、通常情報を得難い箝口症 mutisum とか、緊張症 catatonia 患者または轉換障害患者に行なう。(後略)(大韓神經精神醫學會編『神經精神科學』ハナ醫學社 1997年4月 p.704.)

知識をもったことになり、自分の胸にだけ秘めていた愛が麻酔劑のために外に曝けられるのが手術の痛みに耐えることよりも辛かったのもあろうが、それよりもその愛を最後まで奥深く清く守りたかったのであろう。

一葉の『十三夜』においては、(下)に入って、七年まえの愛の相手と邂逅する場面をもって、愛の切實さが描かれている。鏡花の『外科室』においても、九年前の二人の出会いが(下)にて紹介される。構成的な面から見れば、兩作品とも(上)で現在の狀況を、(下)でその敷延の説明をしている。内容の面から見れば、お互いに育んで來た二人の愛が望まない人

との結婚で壊れるという設定が『十三夜』で描かれた愛の姿であり、初の出会いから九年の歳月の間育んで来た愛が、望まない相手との結婚を超越し死をもって結晶するというストーリーにもって行くのが『外科室』である。

3. 愛と結婚のすれちがい

望まない相手と結婚するまでの経緯を『十三夜』で見てもよい。お關が原田と結婚にまで至ったのは母親が回顧するごとく原田側の一方的なものだった。

先方は忘れたかも知れぬが、此方はたしかに日まで覚えてゐる。阿關が十七の御正月、まだ門松を取もせぬ七日の朝の事であつた。舊の猿樂町のあの家の前で、御隣の小娘と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が、通り掛つた原田の車の中へ落たとつて、それをば阿關は貫ひに行きしに、その時はじめて見たと言つて、人橋かけてやいと貫ひたがる。

このような原田側の一方的な一目ぼれではじまった結婚話は、原田の「火のつく様に催促して」結婚まで至ったものの、親は二人の身分違いなどを心配していた。

御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまだ根つからの子供で、何も稽古事も仕こんでは置ませず、支度とても唯今の有様でございますからとて、畿度斷つたかしれませぬけれど(中略)稽古は引き取つてかあでも充分させられるから、その心配も要らぬ事、兎角くれさへすれば大事にして置かうからと、(中略)此方から強請た譯ではなけれど、支度まで先方で調べて、(中略)交際だけは御身分相應に盡して、平常は逢いたい娘の顔も見ずにゐまする。

母親のこの言葉からも分かるように、二人の身分違いで恐れたものが不幸な結婚として現われたのである。

結婚して半年は「關や關やと下にも置かぬやうにして」いたが、長男太郎の妊娠直後の時期に夫は變心する。(上)にはお關の結婚七年間の生活の實態が、彼女の訴えを通じて切實と語られる。その有り様は、

- ・物語ふは用事のある時、慳貪に申しつけられるばかり
- ・朝起きまして機嫌をきけば、不圖脇を向ひて庭の草花を態とらしき褒め詞
- ・朝飯あがる時から小言は絶えず
- ・召使の前にて散々と私が不器用不作法を御並べなされ
- ・二言目には教育のない身と御蔑みなさる

- ・表向き實家の悪いを風聴さなれて、召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさる。
- ・私のする事とは一から十まで面白くなく覺しめし

という状態であり、夫はお關のことを、「家の内の楽しくないは妻が仕方が悪いからだ」「詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬ」「いはゞ太郎の乳母として置いて遣はす」「張も意氣地もない愚うたらの奴、それからして氣に入らぬ」といい、まるで鬼のようになっているのである。お關が離縁の決心にまで至ったのはこのような夫の意地悪行動や詞による耐え難い屈辱であった。

お關の夫の原田勇は、父親の言葉で「彼の通り物の道理を心得た、利發の人」「随分學者でもある」「世間に褒め物の敏腕家」「彼れほどの良人」とあり、お關の言葉では「彼ほどの動きのある御方」「名のみ立派の原田勇」というように、原田は奏任官として一方では社會的評價を得ていることは確かである。夫が當時の社會では奏任官という高級官僚で世間に認められる人間であるのにたいし結婚當時のお關は「教育のない」十七歳の少女であった。不幸な結婚生活は、まず二人の身分の違いに起因することと思う。原田の地位である奏任官とは、

明治十九年(一八八六)三月の高等官等俸給令で定められた三等以下九等までに位づけされる高等官。各省の課長以下の事務官や技師などがこれに相當する。任官にあたっては内閣總理大臣または各省大臣が勅裁を奏請し、官記には内閣の印を「鈴し」、内閣總理大臣が「宣す」ものとされた。明治二十年の文官試験試補及見習規則では奏任官試補の任用は高等試験によるととされたが、帝國大學卒業者はこの試験を免除されていた。しかし、明治二十六年の文官任用令により奏任官の任用は原則として文官高等試験合格者のみに限られることになり、帝國大學卒業者の試験免除は廢止された。

(國史大辭典編輯委員會編『國史大辭典』第八卷 吉川弘文館 昭和62年 10月, p.577.)

とあるので、原田勇が帝國大學卒業者として無試験の特典をうけた奏任官であるか、帝國大學または他の大學を卒業して文官高等試験を合格した奏任官かは敘述がないので明らかでないが、何れにしても高級官吏であることは間偽いない。

夫原田勇のお關への「飽き」から始まった不幸な結婚生活は、七年の年月を迎え、もう取り替えの効かない状態に陥った。お關は家出を決心して幼い太郎も置いたまま離縁状³⁾を

3) 明治六年五月太政官布告第一六二号によって妻が初めて離婚請求権を獲得した。從來夫が獨占していた專權離婚の權利を否認して、妻の側からの離婚請求を許したもので、「夫婦ノ際、己ムヲ得サルノ事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖トモ夫之ヲ肯ンセス、之レカタメ數年ノ久ヲ經テ終ニ婚期ヲ失ヒ、人民自由ノ權理ヲ妨害スルモノ不少候、自今右様ノ事件於有之ハ、婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内付添直ニ裁判所へ訴出ニ苦候事」と布令している。

(『明治前期家族法の新装』高柳眞三 有斐閣 1987年 8月, p.365.)

とってもらいに實家へ歸って来る。不幸な結婚生活とその結着としての離縁話は、お關側からみれば、望まない相手と結ばれたからなのである。

『外科室』を見てみよう。一體、伯爵夫人にとって、九年にわたる結婚生活は如何なるものであったのだろうか。結婚への諸事情についての敘述はあまりないが、同時代の結婚制度は親や親戚が決めた例が續出していた。田澤稻船の『五大堂』(明治二十九年)には昌頭文に、

世のうれしき事はかずあれど、親が結びし義理ある縁にて、否でも否といひいでがたき結髪むすの夫にもあれ妻にもあれ、まだ祝言のすまぬうち、死せしと聞きしにまさりたるはあらずかし。こゝに娘で名高き青柳子爵の一人娘、糸子といへるも、未來の夫ときだめし人の、心に染まぬそれ故に、うき年月をおくりしが、此頃おもき病にて、うせしときしうれしさに、今まで青き顔色も、きのふにかはる美しくさ。

(『明治女流文學集』(-)明治文學全集81 筑摩書房 昭和41年 8月, p.262)

とあり、青柳子爵の一人娘糸子は、人の死を喜ぶことは不謹慎なことではあるが親の決めた婚約者の死を喜ぶ子爵の令嬢を主人公とした『五大堂』が、この『外科室』の一年後に發表されていることを思えば、歸船伯爵夫人の結婚も、親や親戚が決めた結婚だったのだろうと想像がつくのである。法律の上からも華族令で結婚について規定しているのは、第十四條と第十七條である。

第十四條では爵位をもつ華族(戸主)が結婚するときは役所の戸籍係に届けをするまえに宮内大臣の「認許」を受けること、

第十七條では華族の家族が結婚するとき、戸主(あるはその法定代理人)は同意をあたえる前に宮内大臣の「認許」をうけること。

(淺見雅男『華族たちの近代』NTT出版株式會社 1999年 10月, p.90.)

と義務づけている。このような規定は、貴族の令嬢であった伯爵夫人と平民の醫學生であった高峰との間の愛を芽生えさせるための架け橋になることは現實的には程遠いものであって、彼女は心から愛していた相手と「死」をもって結ばれる。その「死」という極端な結末が、彼女にして望まない相手との結婚生活がどれほど辛かったかを代辯している。

貴船伯爵と夫人の間には、身分差から生じる不和などはなかったはずで、虐待や輕蔑した言葉遣いなどの敘述はない。また夫婦の不仲の描寫もない。が、夫人は夫を愛していなかったもので、その結婚生活が決して幸福だったとは言えない。『外科室』で描かれている夫人がなさんとしたのは、まさに、「死」によってはじめて果たされる彼女の愛の姿である。

ただそこに、彼女のこの死を賭けた行爲を躊躇させる唯一の存在として、「姫様」とよば

れる『七八歳の娘』がいることに注目したい。子供の存在による女性の苦悩という面を捉えているのは『十三夜』の世界と一脈通ずるものがある。

思ひ切つて置いて來れど、今頃は目を覺して、母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、煎餅やおこしのたらしも利かで、皆々手を引いて鬼に喰はすと威かしてぐもゐるやう、あゝ可愛さうな事を

子供を寝かしたまま家出したことの切實さと子に對する不憫が入り交じってお關は血の涙を流している。子供まで諦めざるを得なかった切迫な心構えで家出をしたものの、子を捨てることは世間で許してもらえないことである。お關は自分に内在する人情の葛藤を押しえ切つて離縁の決心まで至ったのであるが、父親の説得は彼女の矛盾を突き通したものであった。

太郎という子もあるものを、今日までの辛が棒がなるほどならば、これから後とて出來ぬ事はあるまじ。離縁を取つて出たがよいか、太郎は原田のもの、其方は齊藤の娘一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるまじ。同じく不運に泣くほどならば、原田の妻で大泣きに泣け。

結局、お關は父親に論されてて、婚家へ歸る決意をする。

成程、太郎に別れて顔も見られぬ様にならば、この世にゐるとして甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとてどうなる物でござんせう。ほんに私さへ死んだ氣にならば、三方四方、波風たゝず、兎もあれ、あの子も兩親の手で育てられまするに、つまらぬ事を思ひ寄まして、貴君にまで嫌やな事を御聞かせ申しました。今宵よりは關はなくなつて魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば、良人のつらく當たる位、百年も辛棒出來さうな事。

『外科室』で描かれた貴船伯爵夫人は子供への情愛は情愛として決然として前を見定めていたのに対して、お關は子供のために自己を捨て、録之助への仄かな想いも歸らぬ昔のことと封じこめ、忍従を強いられる原田の家へ戻って行く。不幸な結婚より愛を選択するという積極的な姿勢をとっている泉鏡花の作品世界と、世間の人情に吸収されてゆく敘情的な一葉の作品世界との違いと言えよう。

4. 泉鏡花 — 「婚禮果たしてめでたきか」

「愛と婚姻」は明治二十八年五月、『太陽』に発表された泉鏡花の評論である(『評論鏡花全集』巻28「愛と婚姻」岩波書店 昭和17年11月、p.242.)。『外科室』の発表直前の時期に当たる「愛と婚姻」は、「婚禮果たしてめでたきか」と問いかけ、「豈寒心すべきものならずや」と応えて、親や親類によって相手が定められ、彼らに祝福される当時の結婚の在り方に對して疑問を呈して、結婚に際しては「愛」を必要なものと考えている内容のものである。『外科室』の貴船伯爵夫人と高峰の情死を語る最後の部分はこの評論と関連して解釋出來よう。

青山の墓地と谷中の墓地と所こそは變りたれ、同一日に前後して相逝けり。

語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。

二人の情死を、親の決めた結婚によって二人の戀愛が妨げられたゆえの結末、婚姻という制度によって壓殺された個人の悲劇を描いたものと捉えれば、末尾の一文はその制度を強いる社會の矛盾を告發し、社會を批判したものと解釋できる。「愛と婚姻」の「要するに社會の婚姻は、愛を束縛して、壓制して、自由を剝脱せむがために造られたる、殘絶、酷絶の刑法なりとす」という部分と関連して考えれば、「愛と婚姻」の思想が『外科室』に描かれた愛の形として描かれているのである。

一方、『十三夜』の結末は次のようである。

其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげにいて力なきさうの塗下駄のおと、村田の二階も原田の奥も、憂きはお互いの世におもふ事多し。

ここには、二人の愛を全うするための、心中や後追い自殺は存在しない。それどころか、録之助もお關も離別の時に一滴の涙さえこぼすことはなかった。『十三夜』のラストシーンに描かれているのは、浮世に疲れ果てた哀れな二人の姿と淡やかな月の光だけである。

親の決めた結婚が不幸な結果をしたのは『十三夜』も『外科室』と同じ設定であるが、その不幸をおい晴らすための積極的な行動をお關や録之助に期待できない。「愛と婚姻」の中で語られている「社會」に、お關も録之助も屈服してゆくのであって、その二人の寂しげな姿から「悲愛」は一層強くなってくる。

おわりに

樋口一葉の『十三夜』と泉鏡花の『外科室』は、愛と結婚のすれ違いを切實に描き出した作品である。『十三夜』におけるお關と録之助の愛は、世間の秩序に従順するものであった。また、お關の子に対する愛と人情は、自己を戻すという意識より強いもので、録之助の愛の挫折による自暴自棄は回復の期待をもてない虚無なものだった。

『外科室』にも、望まない相手との結婚により不幸な生活、自己意志の自由を獲得するための苦惱の姿を扱っていて、それは『十三夜』と同じである。しかし、「死」で貫いた伯爵夫人の愛の姿は至高なものであって、続く高峰の情死は、不幸な結婚より死をもって愛を追うという積極的な愛の態度が見られる。

兩作品が同じ主題を扱っていながら異なる結末を作り出したのは、一葉と鏡花という作家の、愛と結婚に対する見解の違いによるものであろう。「社會」に反發する形で表現したのが泉鏡花の『外科室』に現われた「悲愛」の姿としたら、一葉は「社會」あるいは「世間」に戻って行くしかない「悲愛」を描き出したのである。

【参考文献】

- (1) 外崎光廣編(1971)『植木枝盛 家庭改革、婦人開放論』法制大學出版局 p.150.
- (2) 松村介石(1893)『婦人のかゝみ』警醒社書店 p.22.
- (3) 松村友祝 編(1997)『泉鏡花』日本圖書センター, p.235.
樋口一葉宛書簡 (明治二十九年五月六日[年次推定])
- (4) 手塚豊・利光三津夫編(1969)『民事慣例類集』慶応義塾大學法學研究會刊
- (5) 淺見雅男(1999)『華族たちの近代』NTT出版株式會社, p.90.
- (6) 泉鏡太郎(1942)『評論鏡花全集』卷28「愛と婚姻」明治二十八年五月 岩波書店 p.242.

使用テキスト

『全集樋口一葉』2 小説編二 小學館 1996年 10月

『泉鏡花集』日本近代文學大系 7 角川書店 昭和 1969年 11月

要 旨

『十三夜』における愛と結婚は、副題に見られるように、泉鏡花の『外科室』と比較したものである。

『十三夜』は明治28年12月、『外科室』は6月、同じ『文藝俱樂部』に発表され、発表誌が同じであることと、発表時期が近いことによって、両者は影響関係にあるものと認められる。

両者ともその氣の進まぬ結婚をして、數年を経て思わぬ出合をし、『外科室』は男女が心中に近い自殺を遂げ、『十三夜』は男の不幸に何をすることもなく女は別れてゆくという筋である。『十三夜』のお關は、偶然のことで身分違いの奏任官原田勇に見こまれ、無理矢理結婚させられ、子供の生まれた頃から虐待され、離婚を決意して家に歸るが、父親に説得されて歸って行く。その歸り道に幼な友達の高坂録之助の人力車に乗せられ、録之助がお關の結婚の後、身を持ち崩し、自暴自棄になっているのを知る。お關は今更のように愛のない結婚をなげくが、どうしてやることもできないのであった。『外科室』は高峰という醫學士がまだ學生であった頃、小石川の植物園で逢ったある女性を忘れかねていて、九年後伯爵夫人となっていたその婦人と外科室で執刀醫と患者という関係で對面する。婦人も高峰を忘れずにいて、手術前に飲む麻酔薬を、それを飲めば、本當の事を口起ると主張して服薬を拒む。結局婦人は高峰のメスを胸にあてて死に、高峰も時をおかずに自殺する。『十三夜』との類似点とえば、結婚は愛によって結ばれるものであり、一旦男女の間に兆した愛は長く消えることがないというのである。この愛を絶対視する思想は北村透谷に發し、鏡花も一葉もそれに共鳴したと思われるのである。

お關は家のために死なずに婚家に戻るが、『外科室』の場合は、男女が愛のために殉じてしまう。この辺が男性作家と女流作家の違いであると思う。

キーワード：明治時代, 社會風潮, 戀愛, 結婚, すれちがい, 悲愛

투 고 : 2003. 11. 24

2차 심사 : 2003. 12. 19

3차 심사 : 2004. 1. 8

住 所 : (110-743) 서울시 종로구 홍지동 7번지 상명대학교 일어교육과

전 화 : 02-2287-5118

E-mail : smpn@smu.ac.kr